

『日本語はどこから生まれたか』（ベスト新書 05 年）の新しい評が最近（08 年、5 月 30 日）「不二草紙」という名のブログに載りました。この評は私（工藤）が本では書けなかったことを見事に言ってくれました。大野晋に関する評もまったく正しい。一カ所だけ、日本語と印欧語が似ていると私が述べたとされている点に、数（数え方）や人称、とあるが、これは、文法的数（単数、複数、双数など）や人称、と言ってもらいたかった。末尾に「この本自体、なんだからまくまとまっていないカオスの香りがプンプンしていますけど（笑）」とあるが、じつに愉快。全文を「不二草紙」氏の許可を得て下に添付します。

2008. 05. 30

『日本語はどこから生まれたか』 工藤進（ベスト新書）

昨日、秋田弁はフランス語に似ているなどと半分冗談で書きましたが、この本の著者である工藤さんは、秋田県の出身、そしてフランス語・フランス文学の専門家でいらっしゃいます。そして、東京弁が外国語に感じられるとどこかでおっしゃっておいりました。そう言えば、秋田人（いやむしろロシア人か？）であるウチのカミさんも、標準語でしゃべっていると疲れる、あるいは本当に疲れ切ると標準語が話せなくなると言っています。私なんか見事に方言（母語）を持っていない超標準日本語話者なので、その感じがどうしてもわかりません。さてさて、そんな日本在住秋田人（？）である工藤先生の本、日本語と印欧語の起源を同一とするなどと言いますと、どうしてもその筋の（名前とnameみたいな）トンデモ系を想起してしまいましたが、それこそトンデモありません、ほとんど学术论文と言って良い内容の本でした。そして、なかなか刺激的、案外難解、また言語の本質を鋭く突いた記述も多く、楽しく読ませていただきました。

帯にはポスト「タミル語起源説」とあります。これはある意味正しい。〇〇語起源というものは提示されていませんから、なんだ看板に偽り有りじゃないか、ということにもなりそうですが、あくまで工藤先生が言いたいのは、日本語と印欧語に共通の祖語があるということなんだと思います。ですから、一つの言語に日本語のルーツを求めようとするタミル語起源説とは、その基本的な姿勢というか考え方が違うわけです。つまり、誰かさん（大野晋さん）の「日本語はどこから来たか」という発想ではなく、ま

た安易に「どこで生まれたか」でもなく、「どこから生まれたか」であるわけでした、そのスタンス自体が売りなのです。 いや、私もですねえ、誰かさんから直接お話をうかがう機会もありましてね、なるほどよく出来た学説だと感心した記憶もあるんですが、どうも基本的（おそらく生理的）なところで拒否反応が出るんですよ。単純にですね、タミル語と日本語は似ている、それは日本語がタミル語起源だからだ、ではなくて、タミル語と日本語が同源なんではないか、と思っちゃうんですよね。 Aさんと私が似ているからといって、Aさんを私の生き別れたお母さんだと決める必要はありませんよね。もしかすると兄弟かもしれない。そういうシンプルな可能性というものを捨ててしまっているのか…と。 というわけで（？）、工藤先生は日本語と印欧語が似ている点を列挙していきます。それはもちろんナーメとナーメのような次元、あるいは誰かさんの（語呂合わせやこじつけにも見えないとも言えない）語彙や文法、文化面での類似の列挙とは違いますよ。数（数え方）や人称、あるいは否定の概念的な部分での類似を説明してくれているんです。これは非常に興味深くエキサイティングな内容です。まさに日本語と印欧語と、そして秋田語（！）に精通した方ならではの知見です。そう、時々秋田弁も登場しますよ。 さて、こんな興味深い内容の中で、特にワタクシ的にムムムッと反応したのは、双（総）数「モロ」とその対義語「カタ」についての記述の部分です。そう、ワタクシの「モノ・コト論」と大きく共鳴するものがあるんですよね。「モロ」と「モノ」対「カタ」と「コト」という構図です。ここではまだ詳しく書けませんが、私は大きなヒントを得ましたよ。（たとえば、貨幣と文字といった）「コト」を拒否し続けた、「モノ」の国みちのくが生んだ学者さんが見た言語宇宙には、妙な思い込みや、あるいは変に常識的な「枠」や「境界線」などがなかったようです。それだけでも素晴らしい。ま、この本自体、なんだからまくまとまっていないカオスの香りがプンプンしてますけど（笑）。 最終的には、工藤さんってやっぱり縄文人だなんていう感じがしましたね。では、誰かさんは弥生人なのか！？そして私は…。

Amazon [日本語はどこから生まれたか](#)

楽天ブックス [日本語はどこから生まれたか](#)